



第5回 石川家文書整理会のみなさん（インタビューシリーズ：歴史研究の隣人たち）

石川家文書整理会

井上, 舞

市沢, 哲

古市, 晃

木村, 修二

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:65-81

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505411>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505411>



整理会への参加のきっかけ

井上舞

本日はよろしくお願ひします。今日は、石川家文書整理会に参加されている皆さんの率直なお話が聞きたいと思って座談会の場を設けました。あまり気負わずにお話いただければと思います。ではまず、簡単に結構ですので、自己紹介をお願いしますか。

今川武

自分の場合は、住んでいる地域に区有文書が残っていて、それを朝来市さんと地域連携センターさんに協力してもらって整理したことがきっかけで、歴史資料に関わるようになりました。それで、石川家文書整理会にも参加するようにになりました。

小山直樹

昔、地域連携センターが生野書院で開いていた古文書講座に参加したことがきっかけです。ちょうど石川さんのところの文書が出てきた頃で、整理のお手伝いにも関わるようになりました。個人的な事情もあつてずっと継続してきたわけではありませんが、十年ぐらい関わっています。この世界は、一度はまると結構面白くて、しかも石川さんのところは、コピーじゃなくて本物が残されている。文書を見ているうちに、点が線になるのがとても面白くて、ありがたい場だと思っています。



インタビュー会場の生野書院

田中麦子

神戸から来ています。『明石市史』編纂のアルバイトで、文書の撮影をしていました。（生野書院の）館長の奥さんとは高校の同級生で、生野に来たときに整理会のことを教えてもらって、それではまっていきました。古文書は全然読めません。親が転勤族だったこともあって、ひとつの地域について知るといことがすごく面白くて、生野の現在のことは同級生に、古いことはこの整理会で教えてもらうのがすごく楽しくて。神戸から2時間ぐらいかけ

て来ています。石川さんや小椋さんがとても地域のことをよく知っておられるし、やっぱり現物に触れられるというのは大きな魅力ですね。

福本博光

姫路から来ています。石川さんのお醤油を買いに来た縁で参加しています。

小椋俊司

平成十七年（二〇〇五）に生野書院の館長になって、それから十何年、ここですつと古文書に触っています。最初の頃は、生野書院に保管されている代官所関係の文書。ほとんどが地役人の家にあつた古文書で、それは柏村儀作さんという生野の歴史家の方が目を通されたものなんですけど、それを見ながら読めたらいいな、なんて思っていました。そのうちに神戸大学の古文書教室が始まって、そこから古文書にはまり込んでしまいました。令和三年（二〇二一）に館長は辞めましたが、古文書教室とも関わりながら現在に至っています。

石川家文書については、私は石川さんの家の隣に住んでいる関係で、石川さんの亡くなられた御主人もよく知っていましたし、非常に親しみを感じていました。石川家に古いものとか古文書があるということは、親父の代から聞いていました。石川準吉さん（石川家出身の官僚で、歴史研究にも取り組み、生野の歴史についても複数の著作を残す）の『生野銀山と生野代官』という著作があるんですが、古文書をうちの親

父が読んで、準吉さんに渡していたというようなことも小さい頃から聞いていました。当時もどんなものを読んでいたのかな、という興味はあったんですけど、まさかその後十年以上も石川家文書に関わることになるとは思っていませんでした。

最近、整理会で扱っている古文書は手紙ばかりで、読んでもわからない字が多いんですが、聞いたらまだ似たような古文書がたくさんあるらしくて（笑）。私の年がもつかなと思いますけど、楽しみながらやっています。

岡田淳 生野書院の館長です。前館長の小椋さんから教えてもらうことばかりなんですが、今年で三年目になります。私は四十年ほど小学校に勤務しておりまして、学校しか知らなかったんですけど、あえてこういう世界に飛び込んでみると、学校教育では味わえないような、社会教育というか、そういうものの悦びであったり壁であったりといったものを感じているところです。

こうした活動の課題のひとつに、いかに後継者を作っていくか、というのがあるんです。ここに来て一年目のときに、六十五から七十ぐらいのいわゆる退職世代を誘ってみたんですが、ほとんど相手にされませんでした。「何あほなこと言うとするんや。人生楽しまんか」と言われ



ました。「これが楽しまんや」と言っても理解してもらえなかった。「そんなことより、もつとほかの楽しみ方をしたほうが人生えんちゃうか」と言われたら、確かにそうかもしれない。ただその一方で、整理会に新しい方が、それも遠くのほうから来ていただける方が一人、二人と増えていつているのは、非常にありがたいです。それはこの整理会に魅力があるからだと思うんですが、その魅力は一人一人が見つけていくしかないのかなと。そんなことを意識しながら、以前断られた方にももう一度声をかけてみて、整理会を続けていきたいというのが私の

思いです。

山之内弘美 西宮から通っています。最初は、古文書のカルチャーに行っていました。そこがちよつと合わないなと思ってるうちに、友達に誘われて木村（修二）さんが講師をされている古文書の教室に通うようになりました。そこで神戸大学のまちづくり講座（地域連携センターが社会人向けに開催している、まちづくり地域歴史遺産活用講座のこと）を教えてもらって参加しました。そのときに井上（舞）さんが事例紹介で生野のことを話していて、それがとても楽しそうで。生野に行ったら本物の古文書が見られると思っただけど、そもそも生野がどこにあるのかも知らなかったんです。

最初は一緒に講座を受けた友達が「行こうよ」って言うたのに、結局行つたのは私だけでした。それで「見学に来ました」って言うたら、井上さんが刷毛を持ってきて、「はい、山之内さん、これで埃払って」って（笑）。それからここに来るようになりました。ここは排他的なところがなくて、もちろん来ている人の性格にもよるんですけど、みんな受け入れてくれるんです。

それから文書を読むのがすごく楽しい。最初の頃は面白がって、「石川家の御先祖と会話してるんよ」って言うていたけど、最近では御先

祖に「難しい」「字が読めない」って文句言ってます。でも楽しいんです。

井上英俊 朝来市の和田山町から来ています。ここの整理会に来るようになって九ヶ月ぐらい。一番新人生だと思っています。古文書を始めたのは、故郷に帰ってきて間がない頃に、隣の人に「ちょっと井上さん、古文書教室に行きませんか」と言われて。近所の手前、断つたらあかんなどということ。「じゃあ行きますわ」って。とりあえず一回だけ行つてやめるつもりだったんですけど、その会の責任者の方に「井上さん、一年やつたら読めるようになりますから」と言われて。じゃあ一年やつてみようということ。今までやつてきました。分からない字が少しずつ分かってきて、意味もちよつとずつ分かってきて、始めて四年ぐらいいなります。早く読めるようになりたいくて、石川家の整理会にも来ています。

あと、地元にもコピーですけど史料があつて、早く一人前になつて、それを整理したいと思つてやっています。

羽戸尊比古 隣の神河町に住んでいます。平成十四年頃かな、定年退職したと同時に神河町の古文書の会に入りました。そこで二、三年勉強してから、歴史の本を書きたいなと思つてたままここへ電話したときに、小椋さんが電話に

出て。「羽戸です」と言つたら「え、同級生やんか」ということで、偶然小椋さんと再会しました。

私が住んでいたところは、神河町の中でも江戸時代は生野代官所の直轄地だったところ。神河町には旗本の直轄地（福本池田家）もあつて、その大庄屋の古文書はたくさんあるんですけど、当然福本関係ばかりで、自分の住んでいるところの文書がない。それが石川家文書にはある。そんな関係で石川家文書に愛着を持つて、皆さんのお手伝いでも何でも無い、ただ遊びに来ています。

石川家文書と関わつて一番ありがたかったのは、地元の江戸時代の絵図があつたんです。小椋さんから「地図が出てきたぞ、見に来んか」と電話がかかってきたから、農作業を放つて生野書院に駆けつけました。写真を撮つてもいいよということ、撮つてもらつて、現物大で印刷して、家で宝物みたいにして持っています。ここに来れば、たまに私の地元の関係の文書が出てくるので、お邪魔しています。

森明文 隣の神河町から来ています。私も神河町で古文書の会をしています。今年に入つてから時々来るようになりました。最初にここに来たとき、井上（舞）さんに、石川家文書の中

にあった、私が総代をしているお寺に関係する文書を見せてもらったんです。そのお寺は江戸時代に水害で流されて、明治時代に場所を変えて建て替えたという話は聞いていたんですが、建て替える十年ぐらい前から五年がかりでお金を集めて建て替えたというのが、その文書からわかりました。こちらの方はそのお寺のことを全くご存じなくて。こちらでも石川家とそういう繋がりがあつたんだなと思つた次第です。

石川道代 所蔵者の石川です。困っています。最初に神戸大学に相談したときは、一年ほどで要るものと要らないものを分けてもらえると思つていたんです。

初めて内蔵に入ったときに、読めない紙切ればかりがあつて、それを近所のおばあさんのところに持つて行きました。そうしたら飢饉の時に代官所支配地の庄屋が集まつて提出した嘆願書やと言われて。最初は全部燃やそうと思つていたんですけど、これは燃やされへんと思つてそれで今度は仕事の合間に拾い読みしてみようかと思つたけど、一文字も読めない。何にも分からない。それでも読んでみようとして、でも疲れて、諦めて蔵から出てくる。そんなことを一、二年ほど続けていたと思うんです。

最終的にこれは私の手には負えんとわかつて、神戸大学が生野に来ていたときに相談しました。

大学の先生の力を借りたら、一年ほどで要るものと要らんものと仕分けしてくれて量が減るだろうと。それを期待して、読んでほしいと頼んだら、先生たちが朝から晩まで店から動いてくれない。そうすると私は仕事ができない。それで、小椋さんが生野書院の館長だったから、生野書院を貸してくれと言ったんです。小椋さんもこんなすごいことになると思ってなかったと思います。私も一年ぐらいで終わると思っていて、蔵の中から紙切れを引っ張り出してはここに持ってきていました。

私は、本当は仕分けしてほしかったんです。けれど「全部置いておけ」と言われて余計に困った。これから先どうなるか分からへんし、最初紙切れを見つけたときは六十一歳か六十二歳ぐらいやったと思うんです。今八十一歳ですから、自分の寿命も考えないといけない。私は命がなくなる前に井上さんに押しつけようと思っています。

井上舞 それまで家の歴史のことは何か御存知でしたか？

石川 神戸の開港百年か何かのときに、神戸市の教育委員会から「石炭を掘りに行ったのはお宅ですか」って教育委員会から電話があったんです（注・石川家四代目当主石川八左衛門魚連は、幕末に須磨付近で石炭の採掘を行っていた）。

た）。家の者はそういう話を全然知らなかった。主人に「石炭掘りに行ったんはこの家？」って聞いたら「そんな人おれへん」って。それで、教育委員会に返事したら「生野に他に石川さんというお宅がありますか」って聞かれて、「いや、ありません」って。それで電話は終わったんです。どうしてそんな電話がかかってきたかと言ったら、石炭を掘ったときの記録か何か、紙切れが一枚だけ神戸にあるらしいんです。それをたよりに電話をかけてこられたけど、家の者は何も知らなかった。

その後、年末に墓掃除に行ったら教育委員会が探していた人の名前が墓石に刻んであつてびっくりして。石川家はお墓が五十八もあつて、それまで墓掃除はしていたけど、草引きするのだけが精いつばいで、墓石なんかちゃんと読んだことなかったんです。さっきの電話が秋のお彼岸の後やったと思うんですね。それでお正月明けに神戸に電話して、「すみません、私のとこの家でした」って伝えたら、どこの大学か忘れたけど先生が来て、「その人の話を聞かせてくれ」って言われて。そんなこと言われても、この人は一生遊んで暮らした人やという言い伝えしか残ってなかったんです。それで、仕方がないから、その人を描いた掛け軸が残っていたから、それを見せました。そしたら「この

字は有名な学者さんの字で、この絵も多分有名な人が描いています。この人のお墓はありますか？」って言われて、それでお墓に連れていったんです。奥さんの掛け軸もあるのを言おうかと思つたけど、言うたらこの人は家からなかなか帰ってくれてないやろうし、私が仕事ができなくなるから、黙って帰ってもらったんです。

それから神戸の開港一五〇年のときに、神戸市立博物館が家にある石炭の紙切れを展示させてもらえへんかって連絡が来て、貸し出しました。江戸幕府の仕事に協力したということを、明治になつたら知られたらいかんことやつたのかな。だから石炭掘りのことは子孫には何も言い伝えんかったんかなとも思うんですけど。とにかく、家の者は何も知りませんでした。だから、今こうして皆さんに整理してもらつてる中で、いろいろなことを私に聞かれるんだけど、家の者でも知らんものを、よそから嫁に来た私を知るはずもないんです。ここにいる人のほうがよほどよく知ってます。

資料整理の楽しみ

井上舞 ありがとうございます。これまで改めて聞いたことはなかったんですけど、皆さん色々な思いをもつて参加しておられるんだとい



現在整理中の文書群（外蔵①北 101）。木箱の中に、様々な年代、内容の文書が大量に詰め込まれていた。

うことがよくわかりました。

ではここからは、資料の整理作業についてのお話をうかがっていきたいと思います。今、この整理会では、古文書が読める人は目録を撮る。読めない人は写真撮影を担当してもらう。あまり読めないけれど読んでみたい人は、分かる人に教えてもらいながら目録を撮る。という形にしていますが、どうなのでしょう？率直に言って楽しいですか？

なぜこんなことを聞かかという、古文書を読むのが楽しくて、読む会に参加する人は結構いらつしやいます。けれど、古文書の整理となると、目録を採るのが難しいということと長続きしないことがよくあるんです。なので、整理会でやっていることは楽しいですか？ ということをお聞きしたいです。

小椋 すらすら読めたら楽しいです。けれど、何が書いてあるのかさっぱりわからない文書ばかりが出てくると、やつぱり面白くないですね。しょっちゅう山之内さんに「これ何て読むんやろ」って聞いてます。大体でも内容がわかると面白いんですけどね。やつぱり手紙は苦手です。それ以外はまだ読みやすいんですが。

井上舞 今、作業している束、手紙しかないんですよね、残念ながら。

石川 何で昔の人はこんなものを残したんやろ

ね。たまに燃やしてしまいたいと思うこともあるわ。

井上舞 そうですね。石川家文書は、たぶん近代に入ってから石川準吉さんか誰かが整理しているみたいですよ。そのときに不要だと判断したものを一度整理して、そのあと再利用しようと思っただけ残していたのが、今ここで整理している箱(北一〇二)なんじゃないかと。雀翁さん(二代当主・石川伊兵衛長英。雀の絵を好んで描き、「雀翁」の雅号を持つ)が描いた下絵とか、「贈物ありがとう」ぐらいしか書いてない手紙とか、

そういった他愛のない資料が多いですね。ただ、そういう中からでも面白い内容の手紙とか、旅日記とか、巡見使関係の資料なんかも出てきていますよね。整理した人は要らないと思っただけかもしれないけど、整理を続けていけば、また何か見つかるかもしれません。

山之内 私はひとつの文書を五回ぐらい読んだら、前後関係で内容がわかってきます。ただそれをする時間がないのがつらい。だから時々、勝手に一人で来て読んだりしています。そうでもしないと読み切れない。でもそうやって読んでいる中にすごい発見があったら楽しいなと思っただけ。

井上舞 山之内さんは、いつも時間をかけて目録を丁寧に採られているし、内容も毎回じつ

りと読んでおられますよね。小椋さんはどうですか？ 目録を採るのが難しいとか、ここは楽しくないとか、そういうことはありますか？

小椋 目録は、ちゃんと採れているかどうかはともかくとして、そんなに難しいとは思わないんです。ただ、内容があまりわからないまま採っているという感じです。

井上舞 記入する情報がどこに書いてあるかわかっているから目録は採れるけれど、内容がよくわからないから楽しくないという感じですかね？

小椋 そうですね。

井上舞 やっぱり内容がわかる楽しみは必要ですよ。今川さんはどうですか？ 今川さんがお住まいの地域にあつた区有文書の整理は、私も関わっていましたけれど、あのときは読むというよりも、目録を作るところから始めましたよね。

今川 僕は古文書の整理で目録を作るというのは、井上(舞)さんに教えてもらいました。作業していて楽しいのは、同じ人物が出てくる文書や、同じ年代の似たような文書を比較して、自分なりに考えることです。あとはそういう仕事をしていた関係で、お金の動きに興味があつて、経済関係の文書は面白いと思います。関係する文書がいくつか出てきて、それがつな

がつて、そこで身につけた知識を踏まえて歴史小説を読んだら余計に面白くなってくるというような感じですよ。

小山 そうですね。やっぱり以前に目にした文書と後で見た文書が繋がって、見えてくるものがあると、続けてやっていてよかったと思います。やめていたらわからないというか、味わえないことなので。表題だけしか読めなかったり、部分的にしか読めなかったりで十分に読めないこともありますけど。今はもっぱら書簡を読んでいますけど、それが学問的なのというのとはまた別に、自分の中で線になっていくのは楽しいことですね。

それと、私は個人的に、石川家の出身で銀山の大山師の足立家に嫁いだセツさんという女性に興味を持っています。嫁いですが夫が早世するんですけど、書や歌や絵なんかが残っていて、生野代官から表彰もされています。そういう資料を見ると、江戸時代の中央やその周辺との繋がりもわかってくる。色々な可能性を秘めた資料群ということで、それに関わっているのが楽しいですね。

井上舞 小山さんが調べてくださって、石川家の人間関係もずいぶんわかってきましたよね。先ほど、歌や絵という話がありましたけど、今整理している資料の箱は、絵の下書きとか、き



虎の絵。このほかにも、下絵と思われる絵画資料が残る。

れいな料紙を使った手紙などもあって、見た目が楽しいというのがありますよね。

小山 そうですね。料紙だけでも研究対象になるんじゃないかと思うほど色々な紙に書いてあ

りますね。

石川 この間撮影した虎の絵は、誰が描いたのかわからないけど、ものすごい上手だった。下手な絵はたくさんあるけど、あの虎の絵はすごく上手で関心した。

井上舞 ここまでは文書を読める方にお話を聞いてきたんです

けど、次は写真を撮影されているおふたりにお伺いしようかなと思います。福本さんは姫路からここに通われて、最初から写真撮影を担当されていますけれど、楽しいなと思うところはありますか？

福本 楽しいというか、興味があつて来ています。高校三年生ぐらいから、色々なところで写真を撮っていました。

井上舞 そうだったんですね。古文書の写真を撮影するのも楽しいですか？

福本 撮影そのものが楽しいというより、何か知っているものがあつたらいいなと思って。色々なものを撮って、何か興味を持てるものが出てこないかな

というのがあります。

井上舞 石川家文書の場合は中身が読めなくても、料紙とか挿絵で楽しめるというのはひとつの魅力ではありますよね。それと石川家文書の場合は、面白そうな資料が出てきたら皆に声を掛けて一緒に読んだりしていますよね。そういう時間もあるから写真撮影が単純作業にならずに済んでいるのかもしれないですね。石川さんはどうですか？

石川 私はくずし字が読めないから撮影してる。読めたら手が止まると思う。

小山 今お話があつたんですけど、ここはオーブンでしょ。作業もこんな形態だし。だから、みんな勝手にというか、言いたいこと言いながらやっているの、自然に共有するんですよね。そういうのは井上さんから見れば、もどかしいというか「さつさと無駄口たたかずにちゃんと作業しろ」と思われるかもしれないけど、そういうのは置いておいて楽しくやっているとこがあると思いますよね。

井上舞 そんなこと思っていないですよ。でも確かに、皆さんそれぞれ自分なりの興味関心をお持ちですけど、何か発見したときに、一人だけで楽しむんじゃないかって、周りに伝えていきますよね。そういうところも大事ではないかと思えます。

では次に田中さんにお伺いしたいと思います。

田中 さんは、明石の資料整理では写真撮影を担当されていて、読むほうは石川家文書整理会に來られてから本格的に勉強されはじめたと聞いているんですけれど、どのあたりに古文書整理の楽しさを感じられますか？

田中 そうですね。井伊直弼が桜田門外の変で討たれたときの資料があつて、こんな資料がここにあるんだと驚きました。

山之内 あれ面白かったですよね、みんなで共有して。

田中 そうそう。突然、そういう資料が出てくるのが面白い。どうしてそんな情報が手に入るんだろう、つて思うことはあります。けれどそれ以上追求する気はないですね。

小山 田中さんは、水利というか、禹王の研究をされているでしょう？

田中 そうですね。自分の研究テーマを持っているので、整理をしながら関係資料を探したりはしています。あと文字はあまり読めないんですけど、地図とか地理が好きなので、絵図が出てくると自分の興味と関連させて楽しんでいきます。ここにくると、都会とは違う生活があつて、それもまた楽しくて。自分は今まで転勤族で、ひとつの地域に長く住んだことがないんです。だからこういうのは新鮮だし、皆さんがオープ

ンに受け入れてくれる地域性があると思います。

それは生野がこの周辺の地域の中心部で、色々な情報とかが行き交っていたから慣れているんじゃないかと自分では推理しているんですけど。
井上舞 生野は確かにオープンなところはありますよね。外から來たら分かります。

田中 ほかの地元根づいたことがないので、そこは分からないんですけど。でも本当に皆さんフレンドリーですね。

井上舞 皆さん、ほかに自分なりに興味のある文書を見つけたという方はおられますか？

小棕 石川家文書の中に、飢饉の時に石川家が屋敷内にある郷蔵を開いてお米を配ったというのがありましたね。どういう人に配ったのかはよくわからないんですが。生野書院にある代官所関係の古文書にはそういうのは見えなくてね。そういう文書が見つかるのも面白いなと思います。

小山 日記かな。断片的に米を振る舞ったとか、借りに來たとか、貸したという記述がありましたね。

井上舞 それだけの米を持っていたと。

小棕 証文類を見ていたら、石川さんのところが土地をたくさん持っていたのがわかる気がします。ものすごいたくさんさんの証文がありますよね。あれぐらいの文書だったら読みやすいんで

すけど。

小山 私が住んでいるところは農村部ですから、同じ朝来郡内でも生野とは全く別のエリアだったというのは、文書をみているとわかってきましたね。生野ではものすごくお金が動いている印象があります。

井上舞 小山さんの場合は、ご自分でも地元の文書を読まれていますし、他の古文書教室にも参加しておられますよね。それらを踏まえた上で石川家文書を読んでおられるので、地域的な特色がみえておられるんでしょうね。

そういえば、ここには古文書教室や整理会を掛け持ちされている方が、たくさんいらっしゃると思うんですが、井上（英俊）さんはいろんな会に参加されていますよね。

井上英 資料整理はこの石川家文書整理会と、あさご古文書整齊会（旧朝来町域を中心に古文書の整理を行う団体。神戸大学との連携事業の一環として実施）に行っています。あと、朝来市内の古文書教室もふたつ掛け持ちしています。どうしてやっているかと言えば、早く読めるようになりたいからです。それですぐに何かが見えてくるということはないんですけど、自分が疑問に思っていることが、文書の中にふつと出てきて、それがつながっていく。本当だったらもつと但馬全体まで広げないと全体は見えない

のかなと思いますけど、でもまあ面白いです。自分の中で疑問に思っていたことを、整理中の文書の中から見つけるという経験は確かにありますね。

小山 井上（英俊）さんに話したことがあるんですけど、私たちやその上の世代は、ひとりで自分のスタイルで郷土史を調べたりするタイプが多かったと思うんです。けれど、私よりちょっと若い方がそうだと思うんですけど、複数の資料を比べたりしながら調査すると視野が広がりますよね。将来的にはそういうのがすごく大事だと思います。こういう場がないと、読んだり調べたりしてもそれを話題にして共有できないですよ。井上（英俊）さんが偉いと思うのは、読めるようになりたいから、色々なところに行っているということなんだけれど、結果として色々な地域の文書を読んでおられるところだと思います。

小椋 羽戸さんのところは播州の庄屋の家なんです。大体但馬の米というのは、播州米と比べて非常に格落ちで値段が安かったらしくて、その関係で、生野でも、一般の町人なんかは但馬米で、役人とか地役人なんかは播州米を食べていたらしいんですが、そういう関係の資料は羽戸さんのところにはないですかね。

羽戸 そういう関係のものはないけど、生野鉾

山の関係とか、銀の馬車道（生野鉾山寮馬車道。明治初期に飾磨港から生野銀山まで物資を輸送した産業道路）の関係の書類とか。あとは、地元のいろんな文書とか。そんなに詳しくわかるものはないけど、古文書といっても三百か四百ほどしかないの。

小椋 結構ありますやん。村でそれだけ残っていたら立派なものです。

羽戸 読んでみるけど、なかなか読みにくいから小椋さんに頼んでるんです。小椋さんから専門の人に頼んで読んでもらったりして、一応、一通り読んで解説して置いてあるんやけど。

小山 目録も作られた？

羽戸 作った。

石川 それやったら保存しやすいやん。ちゃんと整理して、羨ましい。

羽戸 教育委員会にも渡してあります。けど私にしてみたら、石川家文書ほうが自分の住んでいる地域の様子がよく分かるから。

岡田 そういえば石川さんのところはまだ文書があるんですか？ 書院もけっこう収蔵庫が詰まってるんです。別に石川さんに文句を言っている訳じゃなくて、この先のことを考えたら、やっぱり行政にもなんとかしてもらわないと困るんですよ。石川さん、もしまだあるんやったら、早よ出して。

石川 目についたのはだいたい放り出した（笑）。

所蔵者の思い

井上舞 ここで、整理会の参加者というより、「所蔵者」としての石川さんの話を聞いてみたいと思います。石川さんとは長いお付き合いですけど、ここ数年ぐらいは「燃やすぞ」って言わなくなりましたねえ。

石川 燃やすって言ったら、体を張って阻止するって言ったやん。

井上舞 そうしないとホンマに燃やされそうやったし（笑）。今こうやって整理が続いているきっかけは、先ほども仰っていたように、石川家文書のことを神戸大学に相談されたのがきっかけだったと思うんですけど、十年ぐらいやっているなかで、石川家文書に対しての印象が変わったことなどはありますか？

石川 最初は、神戸大学に見せたら、要るものと要らんものを分けてくれるやろうと思ってたんよ。あんまりにもたくさんあったから。まず仕分けをしてもらいたい。そうしたら十分の一ぐらいになるやろうと。量が少なくなったら保管しやすくなるし、家売ることになっても楽やろうと。ところが「燃やしたらアカン」って

言われるし、「全部置いておけ」って言われるし、一つずつ箱に入れられて余計に量が増えていくし。どうしようもない。最初の頃はそんな感じ。

今は、まあ私が死んだら所有権は子供に移るけど、あの子は興味がなから井上さんに託すつもり。井上さんがいる間に片付いたらいいけど、無理やったらまた次に託したらいい。そのうち「燃やしてしまえ」という人が出てきて、将来的に燃やされることになっても、それは紙切れの運やね。取りあえずはそう思ってる。宝くじがあたったら、みんなが泊まって研究できる場所を作りたいと思ってるけど、当たらへんな。

井上舞 確かに最初の頃は、石川さんは量を減らすという意味で整理をしてほしいと仰っていて、でもこちらは「捨てないで」と言い続けてお互い「何言うてんねん？」という感じはありましたよね。

石川 そう。私のほうからしたら減らしてほしいのに、「将来のために置いておかなアカン」って箱に入れて、だんだんかさが増えていく。

小山 私たちも最初の頃は、何でこんなに何でも残さないといけないんだと思ってました。今は、後の世に生きる人たちのためにきちんと残して置かないといけない、そのために目録も必要だということが分かってきたんですけど、最初は「こんなものまで残すんか」と思って、面

倒くさいなと思ったこともありました。

小椋 ひもやこよりまで残せて言うんですからね。

小山 そうそう。とにかく全部残さないといけないという。だんだん分かってきたんですよ。残す意義とか、なぜそれをするかというのは分かってきた。初めの頃は、きちつと形のあ

るものだけでいいんじゃないかと思ってました。

石川 何年か前にお米が不作のときがあつて、この頃は暑くて魚が獲れないらしくて。うろ覚えやけど、竹野浜かどこかの言い伝えて、「海

のものが獲れんようになったら、山のものも獲れんようになる。そして飢饉が来る」って。昔も似たようなことがあったのかもしれない。東北でも大きな地震が起きて、その前の大きな地震のときに、ここまで津波が来るから家を建てたらアカン、って彫られた石碑があるって書いてあった。長い年月の間に人は忘れ去るけど、過去に起きたことは未来にも起きる可能性はあるよね。それならやつぱり昔のことを書いたものは燃やしたらあかんもんね。

井上舞 石川さんは、最初から石川家文書に興味がないわけじゃないけれど、中身を頑張つて読もうという感じではなかったですよ。

石川 石川家文書のことがかきつけで、（生野書院で開かれている）古文書教室に入ったんよ。

けど、やつぱり家の商売のこともあるし。働かないかん。だから予習も復習もできない。そして進歩しない。それで挫折した。

井上舞 私が一番最初に石川さんと話をしたのが、この書院の二階でしたかね。まだ院生で、文書の写真を撮るバイトをしていたら石川さんがやってきたんですよ。当時は、所蔵者の方だから、きつと自分の家の歴史に興味があつて、ちゃんと中身を読みたいのかなと思っていたら、「古文書なんか読まれへん」「読むのに興味はない」って仰って。

石川 本当に興味ない。

井上舞 私の方は、この仕事を始めて間もない頃は、所蔵者の方は当然のように家の歴史とか、家の古文書を大事にしたいと思ってるし、所蔵者として大事にすべきだ、というイメージを



司会・井上舞

持っていたんですね。石川さんはそれをぶち破ってくれましたね。

石川 今でも興味ないもん。だけど、残さないといけないものだというのは少し分かってきただつて、こんなもの持ち過ぎてごらん、読みたいう興味がなくなるよ。これがね、十枚とか二十枚ぐらいの手紙やつたら、まだ読もうかという気になるかもしれないけど。

小椋 こんな束でね（笑）

石川 ぞつとする。

田中 写真を撮るのも大変な束もありますから（書簡を貼り次いで）二十メートルぐらいになったのを巻いたやつとか。

石川 だから、何でこんなもの置いとつたんやろうつて、腹が立つてくる。処分しといってくれたら、私は古文書の写真なんか撮らんでもええのに。まあ家のことが忙しかった頃は人任せにしていたけど、それが落ち着いてから、どうもこれは迷惑をかけてると思つて、だからここに出てくるようになった。

小山 仕事があるのにね、本当に大変だと思う。

石川 今になつたらよう頑張つたと思うよ。

井上舞 最近、義務で来てた頃より少しは楽しかつたりします？

石川 私が楽しいのはね、ここの人と話をするのが楽しい。みんな違う人生を歩んできてる

でしょ。そしたら、私の知らない世界のことを色々話してくれる。そうなんや、その業界ではそういう風に考えるんや、とか。それが楽しい。今川さんに古文書に書いてある借金金利が適正なのか聞いてみたり。「借金返しません」って書いてある文書が出てきたことがあつて、ちよつと前に『大名倒産』（浅田次郎の時代小説）っていう小説を買つて読んで、あれが現物やつたんやと思つて。

小椋 石川家の日記か何かに、出石のほうから利子の支払いが遅れたということで、鯛を持ってきたというのがありましたね。鯛一匹で利子の返済が延びたかどうか知らんけど、わざわざ出石から持つてきて。

石川 それは知らなんだ。まあ、私が死んだら井上さん頼むよ。嫌になつたら燃やしても構わへん。私が燃やそうとしたやつやから。

井上舞 長生きしてくださいね。

小椋 多分、後世の人がこれを活用するときには私たちはこの世にはいないので、井上さんに代表で報告をしていただきましょう。これも冗談で話していますけど。

山之内 井上さんに任せたら大丈夫と思つて死ぬるつて幸せやんね。私もそう思います。

小山 燃やされへんということだね。

井上舞 みんなさつきから勝手なことばつか

言つて（笑）。

小山 普段からこんな会話をしますもんね。

小椋 俺は上のほうで待つとるから、後から来た人に「大丈夫？ 燃やしてない？」って聞かなアカン（笑）

井上舞 えーと、それでは先生方からはいかがですか？

整理会に集う意味

市沢哲 私も退職まで一年ちよつとなので、皆さんの話を聞きながら自分も幸せな老後をどうやつて設計しようかという、そういうつもりで聞かせていただいていたんですけど、ちよつと幾つか。まず、石川さんのお話を聞いて思うのは、自分の家には古文書なんかない、家の歴史を伝えるものなんて何も残つてない家で育つたんですけど、それで石川さんの御苦労とかを伺いながら、石川さんとの文書が歴史の資料としてとか、古文書としてとか、そういう意味があるというのほもちろんなんですけど、この方々は、石川さんとの文書が呼び寄せているというか、石川さんとの文書があるから成り立っている会やという面もあると思うんですけど、そういう文書の扱いとかについて、石川さんは感じられることって何かあるんで

しょうか。

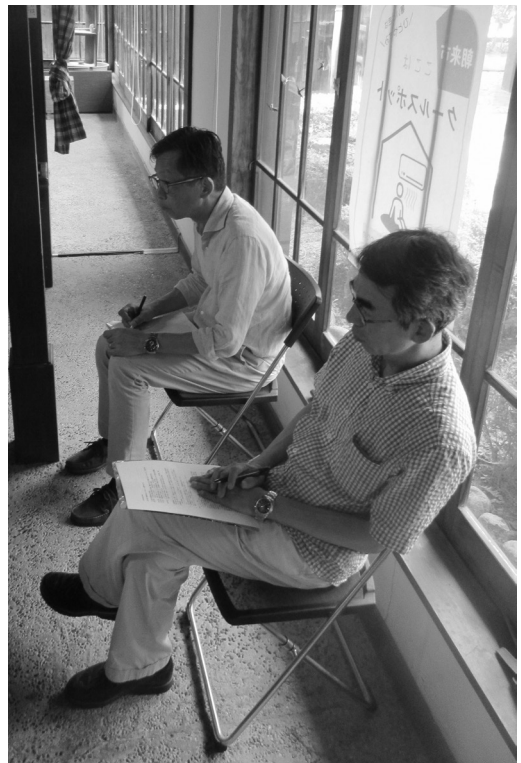
石川 何もないですけど、ただあまりにも量があるから、こんなもん学問的とか真面目にやったら続かへんです。だから、笑いながらこうして触って、ちよつとずつちよつとずつ整理していくのが一番。それとやつぱり、若いときは子供を育てたりするのにお金がどうしても要るやないですか。生きるのに必死やないですか。子供を一人前にして、やれやれ言うた後、死ぬまでの僅かな時間、十年か二十年、ある程度体力のある間、好きなことに携わって生きていけたらすごく幸せやと思う。それが個人的な幸せだけじゃなしに、そのしたことによって、未来の人にとって何かプラスになることが残せたら、それ以上の幸せはない、そういうふうな人生を送れたら、私もし最後死ぬときが来たら、まあまあやったなって思っただけね。若いときは本当に苦労しました。何のために生野に来たのか今でも分からへんよ。最初から最後まで、まあ言うたら立派な昔の嫁を務めましたからね。私の幸せなんて考えてる余地がない。この紙切れにぶつかって、最初は本当に困りましたよ。読めないもの。日本人やし、日本語で書いてあるから拾い読みぐらいできるかと思っただ。でも何も読めない。でも今は、皆さんがこうして楽し

ながら整理をして、それがもしかしたら将来に何か役立つかもしいない。それってすごくいいことやと思う。私一人ではできひんもん。それこそ燃やしてしまう。だから、将来私が死んだ後でも、みんなの役にたつてもらったら物すごくうれしいですね。

市沢 ありがとうございます。

古市晃 私が神戸大学に来たのが二〇〇九年なんですけど、当時は、冬の古文書合宿を生野でやっていて、そのときは生野にきていました。その後ずつと、石川家文書のことは井上さんから話は聞いていて、調査をしておられるというのは聞いていたんですけども、それがこんな感じでずつと続いていたのかということで、改めてお話を伺って大変興味深かったです。そのひとつのきつかけが、これは幸か不幸か分かりませんが、神戸大学の人たちがこの辺で活動していたということはよく分かりました。

もう一つ私が知りたいのは、十年近くこの会が継続してきているということです。市民に



よってこういう活動が担われているというのは、最近はいろいろなところであることはあるんですけど、もうちよつと公の力というか、例えば図書館とか教育委員会とかが中心になっている。ここは書院が一つの求心力になっていると思うんですけども、それが市民の方々の力で続いているというのは結構大変なことなんじゃないかなと思うんです。その辺りがどうして続いているのかということについて、皆さんの中での考えがあればお伺いしたいなと思いました。どなたでも。

小山 昨日小椋さんと電話して、「明日何するんですかね。これが長く続いてきたこととか、

そういうことをお尋ねになるのかな」という話をしていたんです。私は即座に「それは井上さんの魅力でしょ」と言って、まあそれは冗談なんですけどね（笑）。私たちも考えますしね、今の御質問は。でも、やっぱり私が思うのは、文字どおり宝の山だという気がするんですよ。というのは、あまりにも多様な文書がたくさんある。私は自分の住んでいる村の文書もちよつと整理したことがあります。二、三百点ぐらいしかないんですけど、ほとんど後世に残さなきゃいけないものを残しているんです。水

害の関係とか、地震関係のものとか。あと嘆願書とか、訴状として代官所に提出したものの控えだとか、村として残さないといけないものしか残してないです。村によつて若干違いはあるかもしれないですけど。石川家に色々な文書があるのは商家ということもあるんでしょうけれどね。庄屋をしていたから村の文書もあるし、本当に多様な文書がある。その豊かさみたいなものが魅力なのかな。

古市 石川家文書そのものが持っている魅力ですか。

小山 私はそんな感じですね。何が出てくるかわからない、長くやつているけど、いまだにそんなところがありますよね。整理が終わっていないのがまだ沢山残っていて、気が遠くなるよ

うな話で、とても生きていく間に全部を見るのは無理なんですけども。

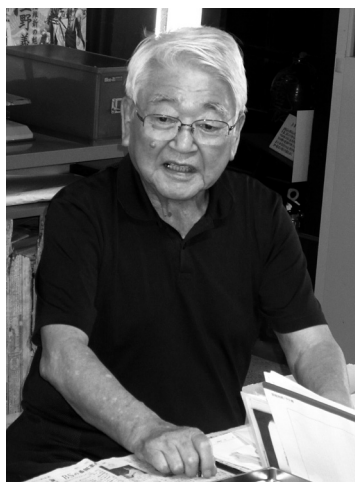
井上舞 まだほかもありますよ。

小山 怖い。

小椋 この間も新聞記者が電話をかけてきて、石川家文書について「一体どのぐらいあるんですか」と聞かれて、「数万点あるんじゃないですか」と言ったら、「そんなに？」つてすごくびっくりしていたんですけど、実際そのぐらいあるでしょ、井上さん。

井上舞 あります、あります。

小椋 だから、それを我々が整理するのは、もちろんできるわけがないんですけど、ただそれだけのものを、我々が例えちよつとでも整理ができるならという、そういう気持ちは当然持っていますし、やらなきゃいけないんだというふうには思っているんです。ただ、読めない文書



がいつぱい出てきたら、それはそれであまり面白くないですよ。

それと、なぜ続のかというのを言われると、やっぱり井上さんの指導の仕方というか、やり方というのがあるんじゃないですか。細かく注意するのはいつも（つけっぱなしの）時計ばかりで、僕と石川さんばかりが言われているんですが。

小山 冗談とか無駄口を注意されたことはないですね。

小椋 ないですね。非常にやりやすいというか。

小山 理解がいいというか、寛容というか。

小椋 それで、休憩時間になるとみんなが集まって、三十分、四十分ぐらいべらべらしやべる、それもまた楽しいですね。

山之内 休憩時間の井上さんの話がまた面白いよね。関西のおばちゃんという感じで。

古市 なるほど。資料そのものの魅力もあるけれども、会の魅力といいますかね、さつき石川さんがおっしゃっていた、いろいろな人が来て知らない世界の話をされるというのは、それはすごい大きい話かなと思っただけなんです、なるほどなと思いました。

それで、これはほとんど余談みたいな話になるんですけど、私は家が奈良でして、最近奈良でふたつ大きなニュースがあつて、ひとつは奈

良に県の民俗資料を集めている博物館があるんですけど、この前当選した知事が、民俗資料なので農具とか民具、ぱつと見似たようなものが多いものですから、要らんものばかりいっぱい集めて、こんなん捨ててもかまへんみたいなことを言つて、物議をかもしてるんです。

もうひとつが、(奈良)県立大学というのがあるんですけど、そこが植物の愛好団体から、貴重な植物の標本を一万点ぐらい寄贈を受けて、絶滅してしまった(植物の)標本なんかも入って大事なものでしたんですけどね。どういう経緯か分からないんですけども、それを職員の方が間違つて捨ててしまったと。数日前のニュースなんですけれども、ちょうど立て続けにそういうことがあったものですから、博物館にしても大学にしても公の機関ですからね、ちゃんと持っているのが当たり前というようなことで、皆さん安心して預けられているものが、そんなふうに行政や研究機関の考え方が変わることで、かなり危なくなったり、実際捨てられたりしている。

そういうことと、今お話を伺っていて、「燃やしてもかまへん」という話もあったんですけども、そうは言いながらちゃんと目録もつくつて、後世に残していられるというように考え方が変わってきているという辺りが、平たい言

い方ですけど非常に感銘を受けたといえますか。資料整理に関わっておられる方々がそういうふうに考えているというようなことが、もうちよつと公の機関であるとか、そういうところにちゃんと届いたらいいのになというようにことを思いました。

石川 行政の人に丸投げしたらね、時代の流れとともに、こんな要らんわつて処分してしまうんです。

古市 まさにそういうことですよね。

石川 ひとつ専門家をかませといったら、捨てたいと言ったときに駄目という人がどうしても必要になる。その駄目という人を関らせてなかつたら、時代の流れとともに捨てられてしまうようなことが起きる。だから、私も井上さんに託すというのはそういう意味なんです。ここは朝来市の建物ですよね。私も最初はこんなことになると思わなかつたから、さつきも言つたように一年ぐらいで片づくと思つてたんです。でもこうなつてしまった。だから、市に託してもいいんやけど、市だけに託したらさつき言つたようなことが起きかねないと私はちよつと危惧しています。

岡田 そんなことありませんよと声を大にして言いたいところですけど、そももいかなんという感じになつてきているので。

石川 奈良の場合でも託した植物の標本に興味を持っている人を一枚かましとつたら、そういうことが起きなかつたかもしれない。それは分からへんけどね。行政は行政なんです。

それでね、時代が変わつたら、私らでもそうやけど、戦争の後は「古いものは要らん」ってみんな捨てた。今頃になつたら「これも要るんや」みたいな。

小椋 今まさにそうやな。

石川 だから、時代によって行政つて物の考え方が違ってくる。時代が変わつて、「捨ててしもうた、えらいことやつた」つて言うたつて、もう取り返しがつかないもんね。奈良県立大の話は今ニュースになってますね、テレビですつと騒いでいる。

小椋 やつぱり地域連携センターがあつたからこそ、今こうやつて石川家文書が残っているわけ、これがなかつたらどうなつていたか分からないですね。

石川 それこそ燃やしてたかも。

小山 本当に分からないと思うんです。さつき行政の話つて言われたけど、私たちの地元(朝来市)でもね、四町がひとつになったんですね。それぞれ合併前に作つた町史を持っていた、町史の時に使つた資料があつたはずなんです。この目録と同じで、後世のために残すものです

よね。今の我々のためにあるわけじゃなくて、この先何らかの形でそれが活用されていく。いろいろな観点で読み込まれたら、まだいろいろな発見が出てきて、それが伝わっていくと思うんですけど、そのためにはまず残さなきゃいけない。だけどそれができてない。町史を編纂したときの目録や資料もどこかにあるんでしょうけどね。さすがに捨ててはいないんでしょうけど。ちゃんと保管して、残しているから大丈夫だよ、とは言い切れないんじゃないかと。

古市 自治体史を編さんするために集めた資料が、結局その後所在不明になったり、紛失してしまったりというのは、よく聞く話ではありませんけどもね。

木村修二 ここまでお話を聞いていて、私も同じような感想を抱いているんですが、私自身もいろいろなところの文書の整理に携わったり、文書群の整理をしてもらう側のコーディネートをしたり、あるいは山之内さんには今回こちらに参加していただいていますけども、別なところでは古文書の読み方を教えるとか、いろいろな立場から古文書に関わっています。そんな私からみれば、この石川家文書整理会はかなり特殊な存在に思えてなりません。それは先ほどからお話が出ていることなんですけど、なぜ皆さんがいろいろなお立場から、あるいは一見さんいちみさんの

ような人も含めて、この会に参加できているのかと考えたときに、井上（舞）さんを含め皆さんが非常に寛容な立場で、この会を運営しているという点がかギなのかなと私はみえます。いろいろな話を聞いていると、会に参加しやすくする仕掛けというか、工夫があちこちにあると感じられます。一方で、例えばあるグループが設立された場合、最初からずつとおられるような人というのは、ともすれば排他的になりかねない条件を持っている人がいたりすること

がよくあります。古文書が読めるようになってくると、読めない人に対する態度が上から目線になったりとか。けれどこの会では、そういうことは恐らくなく、井上さんも会の皆さんも、どんな新しい人を受け入れている（巻き込んでいると言ってもいい）というところが、この会が続いてきている一つのポイントなんだろう



ということは、今日改めて確認できた点です。質問ですが、今日のお話を聞いていて、石川さんご自身が古文書の所蔵者として、少しずつ変化をしてこられたというのが見えたと思います。私の経験でも、宝塚市の和田家文書というのがあって、その文書の所蔵者が「変化」されていった様子

をみてきました。歴史資料ネットワークが阪神・淡路大震災のときに、宝塚市内の被災史料パトロールをして「発見」したのが和田家文書でしたが、その後安全な場所に「レスキュー」して、整理をし、さらにそれを使って「宝塚の古文書を読む会」という古文書学習グループができ、地域の歴史を知るための基礎の文書にしていくという流れをつくっていきました。その一連の活動を通して、当初はただの文書所蔵者に過ぎなかった和田家当主の和

田正宣さんという方が中心におられて、自家の所蔵文書の「レスキュー」から引き続いて整理をし、活用することへのご理解はもとより、ついには古文書を読む会の会長をお引き受け下さり、長らく会を支えておられたということがあったので、それと通ずるものがあるように感じています。

私自身は十年ぐらい前にもここ（整理会）を見学しに來させてもらいましたが、当時と変わらない雰囲気と同じ文書群をずっと地道に整理されていることに驚きました。例えば文書群というのは、私たち専門の人間が整理したら、千点、二千点ぐらいでしたら割と早く整理してしまえるものなんですけども、その分整理しながらじっくり読むということは怠りがちで、まずは目録化することを優先します。こちらでは目録も折々発行されていますが、じっくり読むというを通して、時間はかかっていますが、むしろ時間をかけてでもこの作業を続けていくことに意義を見いだされているというように感じられます。文書群の整理作業において目録の完成というのは一つの成果であり目標となりうると思いますが、皆さんはそのあたりどう思われているのかなと思いました。何か個別に目標みたいなのを皆さんお持ちなのかということ、ちょっと聞いてみたいと思います。

また、私は現在三木市（三木市史編さん室）に出向しているんですが、三木市でも発見された古文書をボランティアさんに整理してもらっています。三木市ではわずかですが、一回あたり五百円ぐらいの交通費をお支払いしています（あと、掛け捨てのボランティア保険も三木市が負担しています）。「報酬」というにはあまりに微微たるものですが、こちらの皆さんが「報酬」についてどのように考えておられるか、お聞かせ願えればと思います。

小山 私の報酬は、こういう楽しさですね、それが報酬ですから、むしろ会費があつてもいいぐらいと思いますね、私はですけど。

というのは、やつぱり続けていかなきゃいけないし、いくべきですし、いつかはどこかで、私なんかは絶対無理ですけど、将来はどこかで完成するでしょうしね。どこかにゴールがあるでしょうし。そうすると、後の世の人がそれを使ってくれる。使ってもらえたらそれが喜びになるんだろうし。どうですか、皆さん、報酬。

山之内 私としては、こつちがお金を払いたいぐらい、ここでのいろいろなものをもらっています。だから報酬って、みんなも考えたことないですよ。ただ、ボランティアの基礎というのを外れんようにせんとあかんと思う。自分のことだけに役立てようとか、セールスしようとか、そういうことをしなければ。私はそう思っていますけど。

小椋 さつき目標と言われましたけど、私の場合だと、以前一冊目の目録ができましたよね。ああやつて形になると、今やっていることがここにつながっているんだと思つて、ちよつとモチベーションが上がるかなという気がしました。何しているのか、どういう形になっていくかというのが全然目に見えないよりはいいですね。あれをまとめて、入力して、チェックして、製本してというのはものすごく大変だと思うんですけど、ありがたいことかなと思います。

井上舞 ちよつと補足させてください。今整理している箱は、現状一括にされている文書を一点として数えると約千二百点なんですけど、そこから枝番を追加していくと、一点が六十点、百点に増えるものもあるので、実際には一万点ぐらいあると思います。ただこれを整理しようとしたときに、皆さん「寛容」と言つてくださるんですけど、きちんとしたボランティア組織的な活動に持つて行こうとしても、こちらの力量不足やここに來られる回数制限もあつて、なかなか責任をとりきれない部分もあります。ですから言い訳的なところもあるんですけど、この整理会については機械的にどんな成果を出すというよりは、のんびり進める中でいろいろ



石川家文書の整理目録

ろな繋がりを作っていきける場にしたと思うっている部分はあります。

それと関連して、この文書群の成果報告として、だいたい二百点ぐらいの整理ができた目録を出すという方式をとっています。本来であれば全点目録を採った上でまとめるのがスタン

ダードなやり方なんでしょうけど、この方法だと目録集が出るまでに時間がかかるので、キリのいいところで冊子化しています。その上で目録を皆さんに読んでもらって、そこから皆さんが読んでみたい文書を自主的に読んでもらうという形をとっています。歴史学や古文書学からしたら邪道かもしれませんが、それがこの整理会での文書の楽しみ方かなと。

あと、蔵書の整理をやっていたときは、整理が終わったときに生野書院と朝来市の埋蔵文化財センターで展示をさせてもらいました。コロナ禍だったので静かに終わりましたけど。今やっている文書もある程度まとまったらまた展示をしたいなと思っています。

小山 あと、小椋さんが生野館長だった頃に始まって、今も継続しているんですけど、古文書を読む会をしているんですね。そのときに、ここで発見された写本なんかを、石川さんに了承をもらってテキストにしているんですね。何冊か読みましたね。またそこで新たな発見があったりします。例えば、漂流してた人がロシアから送り返されてきて、そのときの供述を書き写したもののんですけど、とても面白い。それを私たちは、古文書教室で読ませてもらったんですけど、この整理会で文書が整理されてリストアップされなかったら、まず私たちが読



『異話雑草』。ペリー来航時の風聞や、漂流記などを書き写したもの。石川家には、他にも数点の海防関係、異国情報についての写本が残る。

むことはできなかったと思います。

木村 何でそんな文書がここにあるんですかね。

小山 そんなですよ。

木村 意味をいずれ考えないといけないと思いますね。やっぱり文書群というのは、個別の資料の面白さもありますが、群として、全体として見たときに、面白さというのか、それが地域にとつてどういうことを語ってくれるのかということが分かってくると思うので、いずれにしても広い目で皆さんもぜひ石川家文書の「意味」をお考え下さることを期待しています。

井上舞 まだ色々お伺いしたこともあるんですけど、二時間経ったので、今回はこのあたりで終わりにしたいと思います。皆さんありがとうございました。

インタビュー日時 令和六年八月二十三日